写真が語る 宮本顕治



日本共産党中央委員会出版局

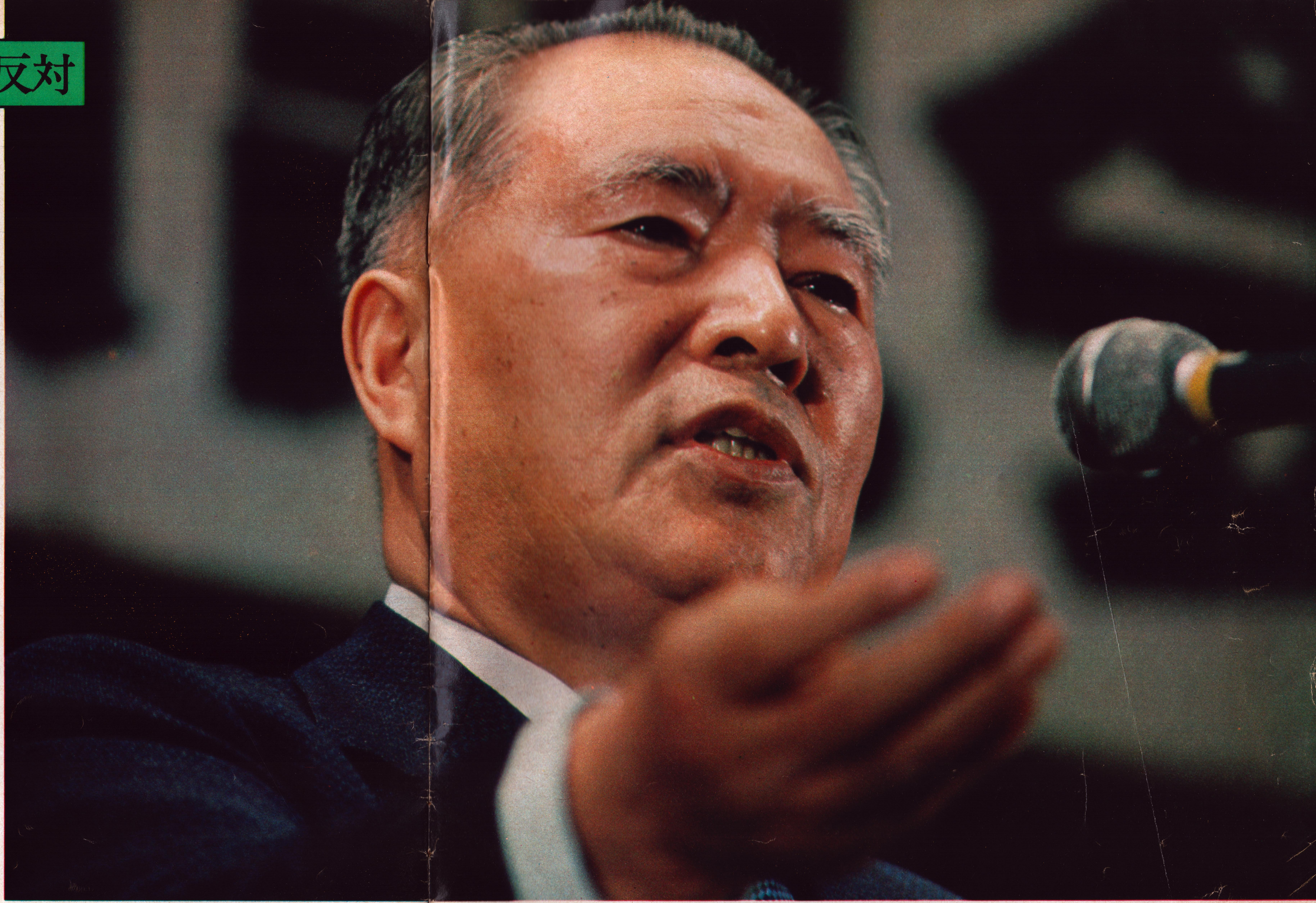
主権在民・侵略戦争反対





「戦争反対、主権在民の民主日本を、という主張が『犯罪』とされたとき、不屈にたたかった党は日本共産党だけでした」「生存の自由、政治的市民的自由、民族の自由を私たちは将来も擁護します」

獄中12年、節をまげずたたかいぬいた宮本さんは熱情をこめて語った。（憲法記念日の講演で）



日本共産党の演説会で訴える宮本さん



日本共産党第13回臨時大会(1976年)であいさつする宮本さん



常任幹部会会議

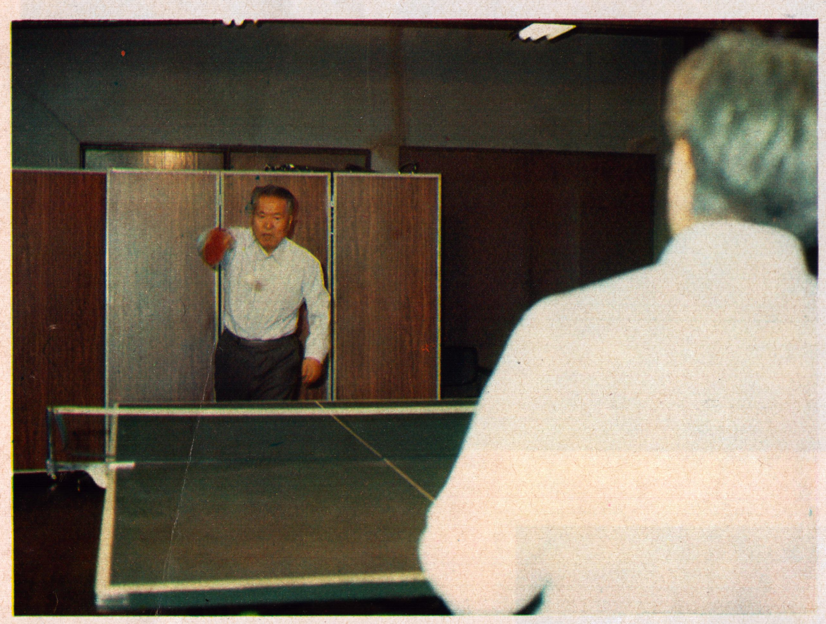
宮本さんは会議を重視し、人の意見をよく聞く。数々の話題と共感をよんだ「教師論」「三つの自由」「救国と革新をめざす国民的合意」の呼びかけ、最近の日ソ漁業交渉での国際正義に立った解決提案など、宮本さんの発言も、この会議場で集団的にねり上げられたものだ。

国政革新の推進力



会議のあいま

党本部で





「赤旗」日曜版編集部で





勤務員たちと



廊下で上田副委員長(左)と立ち話

宮本さんは忙しい仕事のあい間に、党本部内のあちこちに顔を出し、談笑することもある。たまには、本部の卓球室で熱戦を展開する。

伊豆学習会館で



学生たちと語り合う





「……私でもむずかしい大学受験を突破したみなさん方にとっては、共産党の綱領をつかむことはやさしいことでしょう」――ユーモアをこめて学生たちをはげます委員長。



野坂議長(右から2人目)、不破書記局長(左から2人目)らと

政局をリード



六党党首会談にのぞむ(左から２人目、1977年３月17日、首相官邸で)

ロッキード疑獄、福田首相訪米などでの党首会談に出席。日ソ漁業交渉についての会談では,「講和条約で千島を放棄し、こんどの漁業交渉でまた北千島放棄を確認するようなことはしないように」「魚価をつりあげる大資本の倉庫をしらべ規制すべきだ」と主張した。道理と節度のある主張は、しばしば政局をリード。



宮本さんは、10年前革新都政誕生の土台となった政策協定の調印者のひとり。この春、美濃部知事を訪問し、都民との懇談でだされた要望を伝えた。



記者会見

自主独立と国際連帯


来日したフランス共産党のマルシェ書記長と共同記者会見(1976年)


来日したスペイン共産党のカリリョ書記長と語り合う(1976年)


ベトナム労働党の故ホー・チ・ミン主席と(1966年、ハノイで)


スペイン共産党のドロレス・イバルリさんらと(1959年、モスクワで)


イタリア共産党のベルリンゲル書記長らと(1971年、ローマで)

マスコミは宮本さんを「自主独立のリーダー」と呼ぶ。いまでは日本共産党を〝ソ連派〟とか〝中国派〟と呼ぶものはいない。自主独立の立場でこそ、国際連帯も本物になる。

宮本さんはこの立場で、ベトナム、朝鮮、中国、ルーマニア、フランス、イタリア、ソ連などを訪問、各国の党指導者と話し合い、世界の平和と進歩をめざして活動している。

昨年はフランス共産党のマルシェ書記長、スペイン共産党のカリリョ書記長が来日、宮本さんと会談して共同声明を発表。今年はベルリンゲル・イタリア共産党書記長も来日する。



「いつもここで遊ぶのかい？」
「ウン。これ、フーッとふくとおもしろいよ」
散歩の途中、こどもたちにもらったタンポポをフーッとひとふき。

こどもと



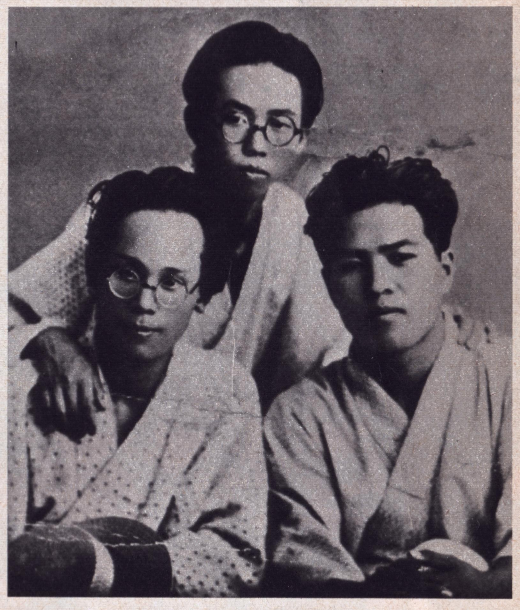
「アノネ、おじちゃん……」「ン？なんだい？」

生いたち

瀬戸内海に面した小さな村での少年時代、宮本さんは勉強もできるが、相撲や水泳、走りっこも得意だった。「坊ちゃん」の街松山での高校生活で思想的にめざめ、東大卒業後日本共産党に入党。逮捕、投獄などさまざまな困難を突破して不屈の共産主義者として成長していった。小さな商家だった家の破産、苦学の体験は、宮本さんの庶民感情の強い土台となっている。



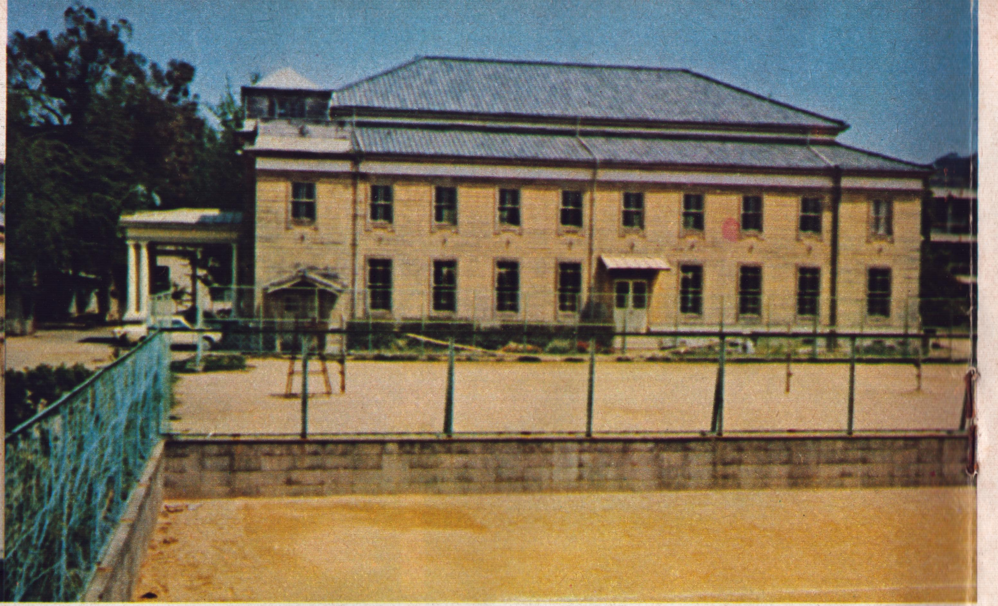
小学校6年生のとき郡内の小学校対抗リレー競走に優勝。松田熊次郎先生と優勝旗をかこんだ選手一同（前列右端が宮本さん）





〔上〕旧制松山高校時代、友人たちと（右端が宮本さん）

〔左〕旧制松山高校時代の弁論部員（前列左端が宮本さん、昭和2年冬、松高講堂前で）





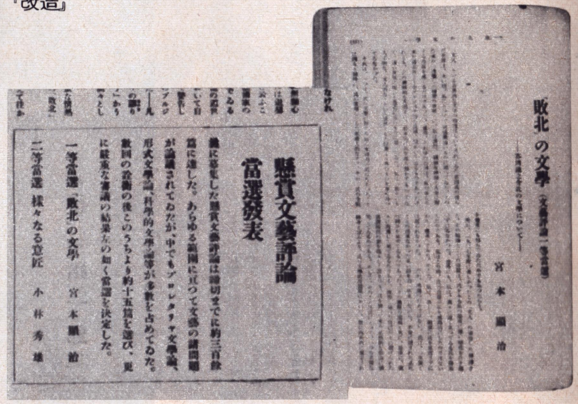


〔上〕旧制松高の講堂。 昭和1～2年の反動校長排撃ストライキの学生大会がここで開かれた。昭和2年の大会では宮本さんが議長の一人に選ばれた。

〔上左〕旧制松高講堂をポーチ（玄関）側から見る。

〔左〕昭和2年ごろ宮本さんが下宿した松山市昭和町の家。東大受験の準備をかねて英文の『国家と革命』などを読んだりした。

宮本氏の文芸評論「『敗北』の文学」（懸賞一等当選）を掲載した雑誌『改造』



懸賞文藝評論
當選發表

識に募集した懸賞文藝評論は締切までに約三百餘篇に達した。あらゆる範圍に亘つて文藝の諸問題が論議されてゐたが、中でもプロレタリア文學論、形式文學論、科學的文學論等が多數を占めてゐた。數回の詮衡の後このうちより約十五篇を選び、更に嚴重な審議の結果左の如く當選を決定した。

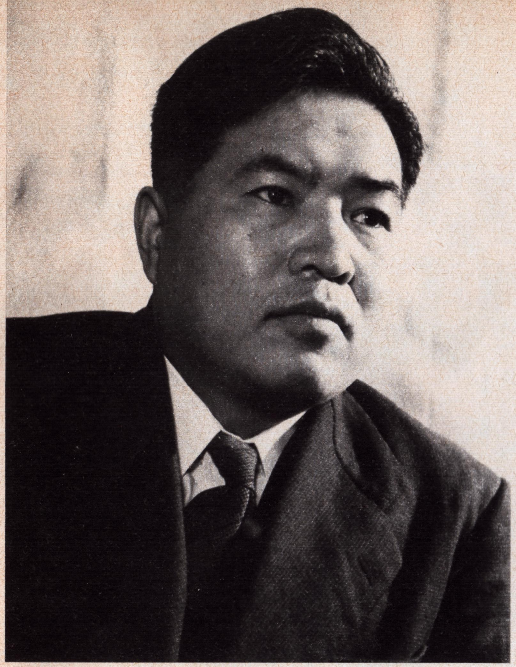
一等當選 「敗北」の文學 宮本顯治
二等當選 様々なる意匠 小林秀雄

「敗北」の文學（文藝評論一等當選）
宮本顯治

市ヶ谷刑務所、巣鴨拘置所の宮本さんのもとに送られた百合子さんの手紙



戦後



▲衆院選に東京一区(旧)から立候補したころ(昭和30年)



解放運動犠牲者追悼集会であいさつする宮本さん(昭和20年11月)▶

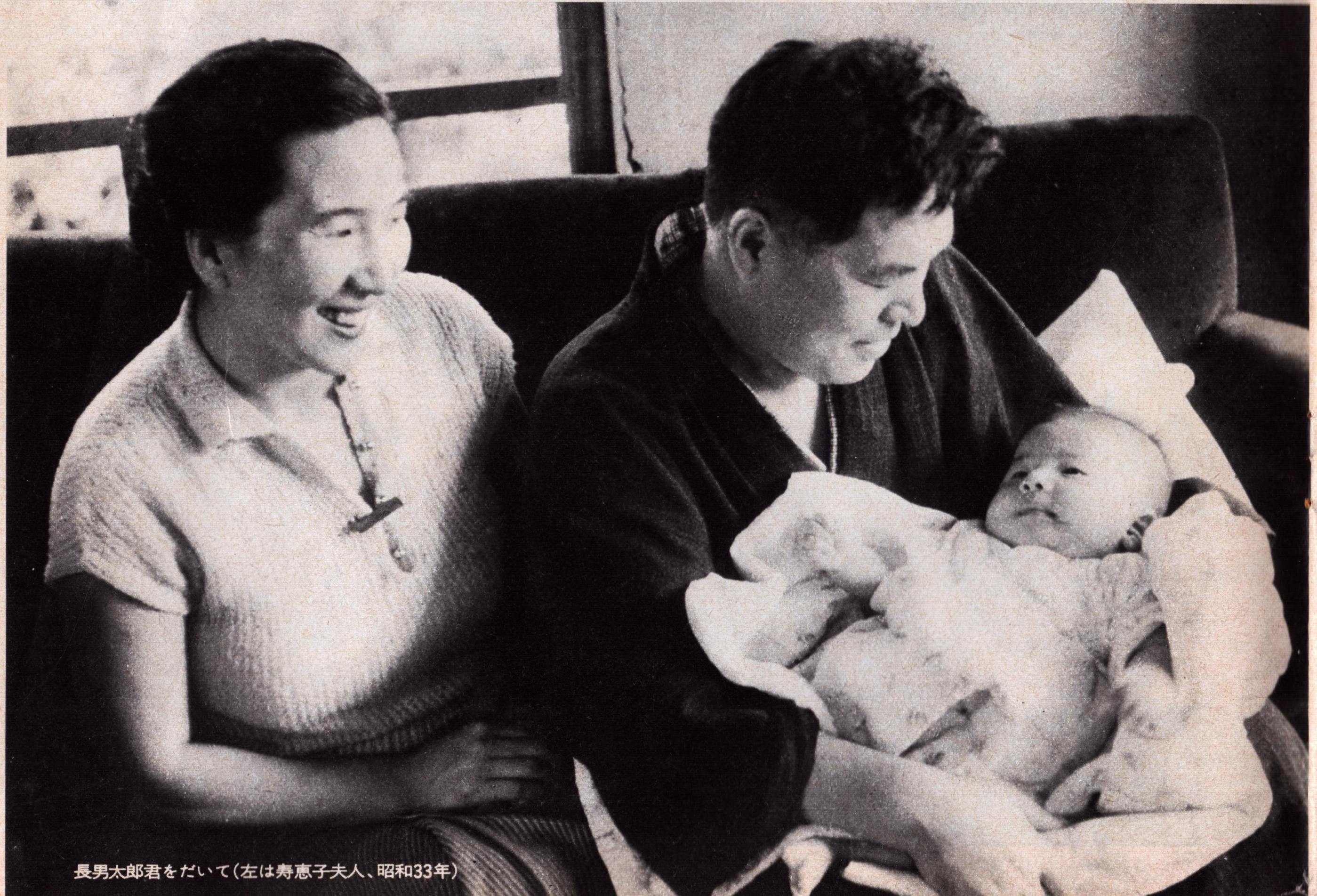
網走で終戦の日をむかえ、十二年ぶりに"しゃば"の土をふんだ宮本さんは、文字どおり焦土と化した日本の再建の先頭にたった。だが、国民の共産党への期待が高まるなかで、アメリカ占領軍の黒い本性はあらわれ、ふたたび弾圧の嵐が――。そして不幸な党の分裂、宮本百合子の急逝……悲痛なできごとのなかで「ルールさえまもれば党はかならず統一できる」と確信をもって党の統一大会、画期的な党綱領の作成に日夜はげんだ。



宮本さんとお母さんと百合子さん(昭和21年)



昭和36年7月、東京・世田谷で開かれた歴史的な第8回党大会で綱領問題を報告する宮本さん(当時書記長)



長男太郎君をだいて(左は寿恵子夫人、昭和33年)

ある日ある時



犬をつれて散歩する

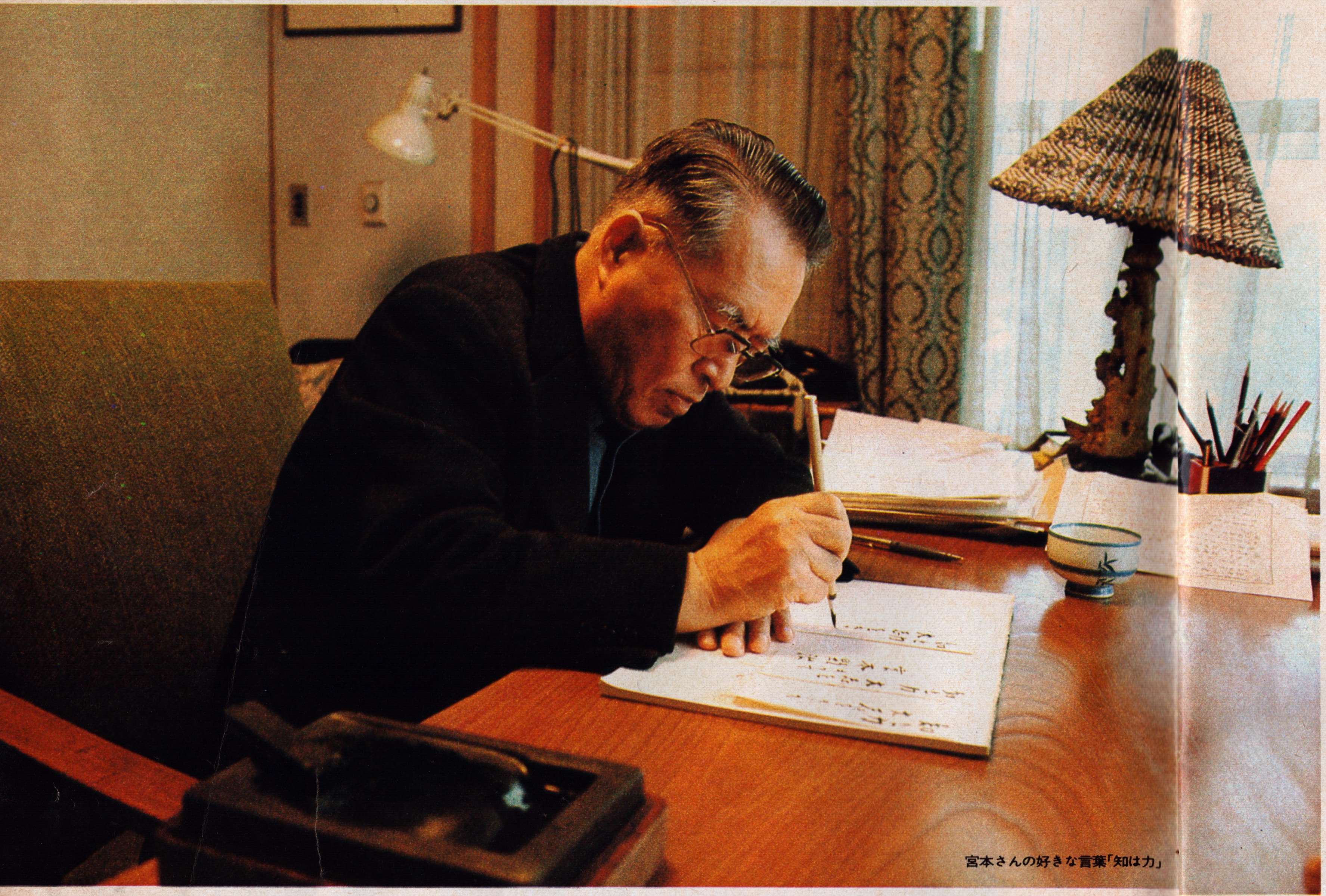


寿恵子夫人と居間で





ひととき



宮本さんの好きな言葉「知は力」



文化人と



演説会で作家の松本清張氏のはげましをうける



写真家の田村茂氏（左）、土門拳氏（中央）と



俳優の宇野重吉氏（右）、津田京子さん（中）と

宮本さんは松山高校時代から、評論、戯曲、小説などを書き、東大在学中、二十歳のとき「『敗北』の文学」で文芸評論家として出発した。宮本さんには戦後も『批判者の批判』『宮本百合子の世界』『宮本顕治文芸評論選集』など文芸評論の仕事がある。また、各界の識者と縦横に語りあった数かずの対談で〝対談の名手〟との評判も――。

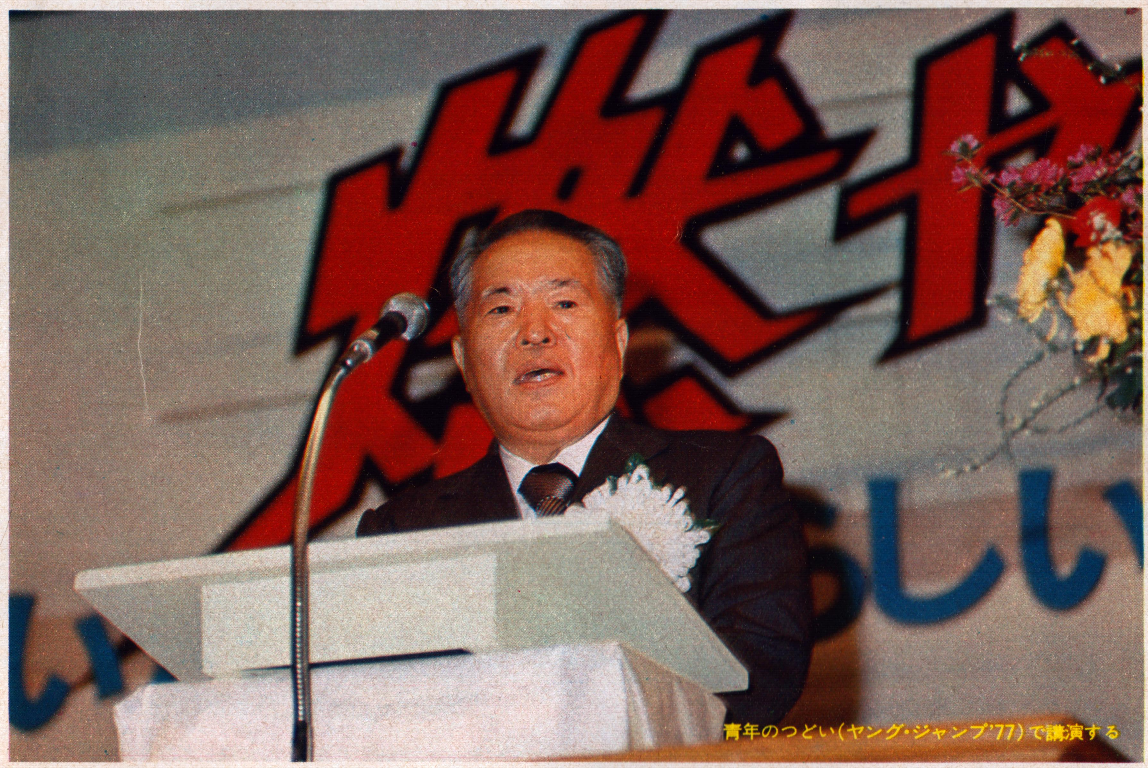


作曲家のいずみたくさん（中央）、歌手の芹洋子さん（左）と

若い人たちと



「われわれはだれでも年を重ねていく。だがしかし共産党員の考えと展望はいつも若わかしくなければならない。エンゲルスが、共産党を青年の党、未来の党だといっていたのは、まさにそこにある」――青年のもつエネルギーに期待をかける宮本さんは、若ものと話すのが大好き。さきごろは、「しあわせと未来をむすぶ女性のつどい」で若い女性たちと対話。「二十歳で結婚に失望するなんて早すぎます。二十歳は花ならまだつぼみ……」。ユーモアたっぷりの返答に会場は爆笑のうず。



青年のつどい(ヤング・ジャンプ'77)で講演する





労働者とともに

「自力で進水させるなんて立派なものだ。みなさんのたたかいは、労働者が生産を立派に管理できることを示したもの」——宮本さんは激励した。独占資本を相手に自主生産九百日。経営再開をかちとる直前、全金渡辺製鋼所支部をおとずれた宮本さん。





第48回メーデーで





みごとに晴れあがった第四十八回中央メーデー。宮本さんは、その隊列の先頭にいた。真の労働戦線の統一――それは宮本さんの心からの願いである。「……日本の民主的再生をめざして、あらゆる妨害や障害をのりこえ、真の革新統一を実現するために、立ちあがろうではありませんか。日本共産党は、みなさんとともに、そのたたかいの先頭に立って奮闘するものであります」

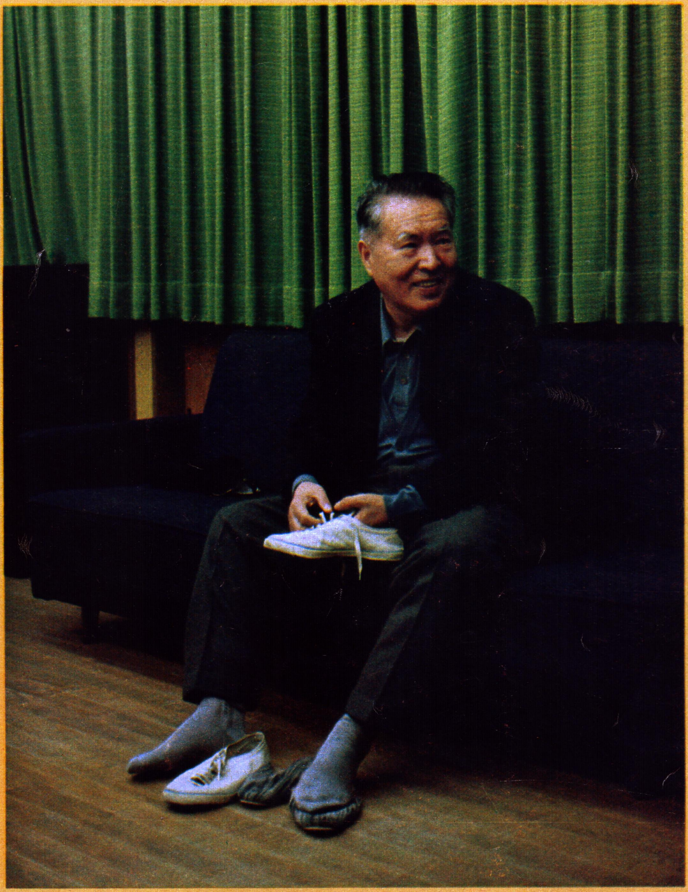


写真　田村茂・篠山紀信・管洋志・佐藤義蔵・岡崎輝雄・秋藤俊夫・
「赤旗」写真部・共同通信

1977年6月1日発行

日本共産党中央委員会出版局
東京都渋谷区千駄ケ谷4―26―7
電話　東京　03(403)6111㈹
振替口座番号　東京2-21096

定価200円